

琉歌に詠まれた酒

昭和五十九年十月

宜保 榮治郎

(一) おもろに表われた酒

一 伊祖の戦思いそのおもひ

井の数遊かずあそび立ち

十と度も若とてだ栄えせ

又い意ぢ地き気い戦く思なひ

又あ夏ははしけち盛もる

又あ冬はは御酒盛もる

一 おもろ小太郎こたろうつが

百歳ひゃくざい御神酒みかみ

差さしよわば ちぐめちよ

世神酒よみかみの数

又、金武きんぶの世の主に

百歳ひゃくざい御神酒みかみ

(十七ー一七五)

(十二ー一六七)

一 名護酒親酒来まもの

親門、開けて

吾入れれ

又掟にしやが

物言にしや来まもの

又真羽地の

たれしけち来まもの

又安和屋部の

世にたまり来まもの

(十二一一一八〇)

一 辺土の子やれば

たところやれば

海苔や良かる物

又我が浦の習い

我が国の習い

又粟神酒造くて

黍神酒造くて

(十七一一一九三)

一 阿嘉の子が

伊是名居て見れば

今帰仁は

御酒ど盛り居る

又饒波の子が

伊平屋に居て見れば

今帰仁は

(十七一一二二六)

一 伊江の東方に

世のつほに

神御酒御真貢

又離れ東方に

又離れおわる吾は

又とわけおわる吾は

(十七一一二二八)

一 佐敷さしきから

御捧みさげや上のほて

八千代やちよ世のつほに

御しやくみ神酒ぬき上あげは

後勝のちまさる拍子ひやし

打うちちゑ みおやせ

又根ね国から

御捧みさげや上あて

八千代やちよ 世のつほに

御神酒みしやく  
(十九一一二九八)

一 世寄よきせ君の

神酒みいきよ寄やら家 若わかい人きよ

若きよい人みが 見欲みほしや

又思おもい君の

神酒みいきよ寄やら家 若きよい人み

又金福かなふくの若わかい人きよ

又具志川くしかわの若わかい人きよ

(二十一一一三九八)

— あまみやみるや仁屋にや

御酒百々度まぢけももと

君が守りせたなまじ

おぼつ 彘たまれて

又しねりやみるや仁屋にや

まが守りせたな

(二十一—四〇二)

— かさす若てだよわか

御み神酒ぬき上げはおしやく

又真物若てだよまものわか

又奥武の浜崎におおく

又奥武のいふ崎におおく

又弟松鳴響たおとうまつなむ

又兄の大屋子思いせいでいやくも

(二十一—四二八)

— 首里在つる見揚がりあみや

神酒寄せせん寄せげらんみいき

又ぐすく在つる見揚がりあみや

(五—二二九)

一 弥勒見ちへ和る  
みろく やは

此の生れど弥勒  
うまれ みろく

此御神酒ぬき上げわらん  
みしやき あ

世はちよわれ

又今日の良かる日に  
けあ

今日のさやかる日に  
けあ

又上の世の門や  
かみ へ

下の世の門や  
した へ

(五三三七七)

一 おもろ音揚がりや  
ねあ

宣るむ音揚がりや  
せ ねあ

御顔拜で  
おかうおが

世御酒の数  
よむいぎ

又保栄茂意地気按司の  
ほえもいじきあじ

保栄茂大国按司の  
ほえもくやくにあじ

(八三三九七)

一 阿嘉のお祝付きや

十百度若てだ栄やせ

しけち真御酒盛りや

又饒波のお祝付きや

(八―四四八)

(二) 短歌に表われた酒

1 歌知らぬ童 節しらぬ童

酒と盃と 持ちち習へ

2 嘉徳ナベ加那が 死じやる声聞けば

三日や神酒つくて 一七日祝お

3 西東ぬ米や マー此<sup>く</sup>処<sup>ま</sup>寄てから

白真神酒つくて 大祝みしまり

4 錢<sup>ぬ</sup>や舞<sup>や</sup>上<sup>が</sup>ゆり 米<sup>く</sup>や寄<sup>ゆ</sup>上<sup>が</sup>ゆり

白真神酒つくて 大祝みしより

5 白真神酒つくて 大祝する事や

思子すえまでも 大祝みしより

6 庭の石垣金なりゆり 浜ぬ白<sup>しろ</sup>砂<sup>すな</sup>米なりゆり

沖や黒潮 酒なりゆり

7 玉ぬ盃や 下司や及ばらぬ

巨<sup>さく</sup>那<sup>ら</sup>奥<sup>あ</sup>方<sup>ん</sup>や 持上げ捧げ

8 殿内あんされが うちまわしりば

みすこさぬ御酒 出そげさぬ

9 一沸しもあらぬ 二沸しもあらぬ

泡盛の御酒 一口給れ

10 泡盛の御酒 出じやなとすれば

中ばしる口に 深めて遊ば

11 酒欲さもあらぬ しゆけ欲さもあらぬ

遊び珍らしやち 吾比<sup>けし</sup>処<sup>け</sup>来<sup>け</sup>たんど

12 醒々としちゆて 歌ぬ歌られめ

泡盛のお酒 給れ歌ら

13 辛酒も給れ 甘酒も給れ

給る程なれば 真三合給れ

14 · かん甘さ御酒 吾一人飲まれゆめ

吾前愛し無蔵と 寄合て飲まで

(以上 大島民謡)

19 · 酒もあがゆらば 比の世をてあがれ

祭りしたたりの あの世行きゆめ

石嶺親方

15 · 嬉しさにまかち 酒小うち喰やひ

代払ひの事や 如何がしゆら

読人知らず

20 · 知る人の外に 語らぬものや

心慰める 酒の甘味

瑞慶覧親方朝紀

16 · あつち舞小此処や 酒肴前なち

我身も此居とて 遊び欲さぬ

読人知らず

21 · づりも呼ぶしかど 親の孝もすゆる

酒も飲むしかど 元祖断じゆる

読人知らず

17 · 酒好きの吾身や 弁当さへあれば

瀧原の馬も 後どなくゆる

読人知らず

22 · 酒やお真人に だんじゆ豊まれる

飲めば百薬の 長の甘味

読人知らず

18 · 姉小たやまかて いな夫もちちゆり

我身やなま童 酒ど盛てる

童謡

23 · 酒や肝の門の 鎖の子がやゆら

飲めば飲む程に 開き行きゆさ

瑞慶覧親方朝紀

24・心して飲めば 心配事も忘れて

酒や命延びゆる 薬やすが

与那原親方良矩

25・まだれ玉たらち 飲む間の浮世

醒めて悪欲の かば如何すが

石嶺親方

26・上げゆらば上げれ 須弥の頂までも

飲み減らち見せら 海の底までも

内間親雲上由栄

27・袴小や脱じも なましみるさくい

金城御酒 飲まぬ限り

謡

### 参考文献

おもろさうし 日本思想大系 岩波書店

琉球大観 島袋 盛敏 沖縄タイムス社

日本庶民生活資料集成 第一書房